

シューベルトの《魔王》における wohl — ドイツ民謡と 1815 年以前の魔王作品を踏まえて —

鴫田 信男

名誉教授

„wohl“ in dem „Erlkönig“ von F. Schubert — unter Berufung auf die Deutschen Volkslieder und die vor dem Jahr 1815 entstandenen Erlkönig-Vertonungen —

Nobuo TOKITA

Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

シューベルト (Franz Schubert 1797-1828) は《魔王》(1815)の第1節第3行 Er hat den Knaben wohl in dem Arm. の wohl を小節の1拍目に置いて、強音節として扱っている。

しかし前稿¹⁾で示したように、シューベルトが《魔王》作曲時に知り得た1815年以前の魔王作品には wohl を弱音節として扱っているものが多かった。日本語の翻訳でも、wohl に「しっかりと」、「大切に」、「心地よげに」、などの訳語を当てているものと、「単に、語勢を強める働きをしている」として、特に訳語を当てていないものがあった。また、独和辞典には「民謡などではほとんど意味のない口調だけの言葉としての」wohl の記述があるが、アクセントの有無については特に触れていなかった。

本稿は、このように扱いの違いのある wohl について、音節の強弱の扱いを改めて確認し、それを踏まえて、シューベルトの《魔王》における wohl の意味と機能を明らかにすることを目的とする。

I. でドイツ民謡や魔王作品における wohl の強弱の扱いの違いを確認し、II. で wohl の強弱の違いと意味機能について考え、III. でまとめを兼ねて《魔王》の第1節の語り手の情景描写の推移を wohl に焦点をあててたどる。

I. 音節 wohl の強弱

《魔王》の Er hat den Knaben wohl in dem Arm. (彼は男の子を腕の中に持っている。この段階ではまだ wohl の強弱や意味が定まっていないので、wohl は敢えて訳さなかった) は4強音、強音間1ないし2弱音の民謡詩行によっている。前稿で示した『独和大辞典』で例示されていた Es ging ein Knäblein wohl über das Land. (少年がひとり旅をしていた) も4強音、強音間1ないし2弱音である。文構造も、代名詞の働き、自動詞他動詞の違い、名詞の格の違いはあるが、代名詞+動詞+名詞句(冠詞類+名詞)+ wohl+前置詞句(前置詞+冠詞+名詞)の配列が同じである。

ただ、wohl のアクセントの有無は辞典では触れていなかった。

そこでここでは、ドイツ民謡、シューベルト以前の魔王作品、そしてシューベルトの《魔王》の順に wohl の強弱が実際にどうなっているかを確認する。

A. ドイツ民謡における wohl の強弱

1. 独和辞典に見るドイツ民謡における wohl の用法と実例

まずその前に、ドイツ民謡における wohl の用法と実例を複数の独和辞典の記述で確認しておく。「《ほとんど贅語的に、特に民衆叙事詩又は民謡において》Es zogen drei Jäger wohl auf die Birsch (ママ). 3人の猟師が狙撃へと出かけた; Es zogen drei Burschen wohl über den Rhein 3人の若者がライン河を越えて行った²⁾」

「《民謡調では意味を強めて贅語的に》Es zogen drei Burschen wohl über den Rhein 3人の若者がラインの河を越えて行った³⁾」

「詩ではしばしば填字として用いられる⁴⁾」

「《民謡の中などで特に意味のないFlickwortとして》Es zogen drei Burschen wohl über den Rhein. 3人の若者がライン川を越えて行った⁵⁾」

「《民謡などでほとんど意味のない口調のためだけの言葉として》Es ging ein Knäblein wohl über das Land. 少年がひとり旅をしていた⁶⁾」

「《民謡などで調子を整えるための埋め草として》Es ging ein Knäblein wohl über das Land. 一人の少年が遍歴の旅をしていた⁷⁾」

以上をまとめると、ドイツ民謡における wohl は、贅語的、Flickwort (虚辞、助辞) 填字、埋め草など、表現はいろいろ違うが、いずれも「ほとんど意味のない口調のためだけの言葉」ということになろうか。前稿で示した「語勢を強める語⁸⁾」、「ここでは単に、語勢を強める働きをしている⁹⁾」という《魔王》の wohl についての註記も、これらの wohl の用法につながるものと思われる。

2. ドイツ民謡における wohl の音節の扱い

a. 辞典の例における音節の扱い

独和辞典の説明は wohl のアクセントの有無については何も触れていない。そこで、まず、その説明に例示されていた Es zogen drei Burschen wohl über den Rhein. と Es gingen drei Jäger wohl auf die Pirsch. の民謡の第1節第1行の旋律を示しておく。もう一つ例示されていた Es ging ein Knäblein wohl über das Land. はゲーテの Alte Feuersegen (昔の火焰祈祷) の最初の詩行である¹⁰⁾。曲付けされた歌唱旋律は確認できなかった。

Es zogen drei Burschen wohl über den Rhein.¹¹⁾



Es gingen drei Jäger wohl auf die Pirsch.¹²⁾



wohl の音節の扱いは、上の例が4分の3拍子の3拍目、下の例が8分の6拍子の6拍目で、いずれも弱音節として扱われている。この2曲は同一の民謡に詩を付けたものである。第1詩行の旋律は同じであるが、第2詩行以後の旋律は微妙に異なっている¹³⁾。

このように Es で始まり行中に wohl を含む詩行を第1節第1行 (1, 2行で1文を構成している場合は、1, 2行) にもつ民謡はこの他にも見られる。Deutscher Liederhort¹⁴⁾ (以下 DLh とする) では全3巻で24曲ほど確認できた (上記の2曲は DLh には収録されていない)。

b. 最初の詩行が辞典の例と同じく Es で始まり同じ文構造によるもの

(1) wohl を弱音節として扱っているもの

DLh で確認できた24曲中23曲が弱音節として扱っている。その中からの2曲と DVI¹¹⁾ からの1曲を示す。

(a) Es hütet ein Schäfer wol an dem Rain, o weh! (羊飼いがひとり畑の境で番をしている、ああ、悲しい) (DLh I 635) 行末に o weh が入り、5強音になっている。wol は中高ドイツ語 (1050-1350) の綴りである。



(b) Es blies ein Jäger wohl in sein Horn. (猟師が角笛を吹いた) (DVI 58-60)



wohl 以下が繰り返されて6強音になっている。wohl in sein Horn がセットで繰り返されているのが注目される。wohl は次の前置詞句と結びついているのである。

(c) Es ging ein wohlgezogener Knecht wohl über eine breite Aue. (よく仕込まれた下男が広い牧場を越えて行った) (DLh III 385)



名詞句と前置詞句にそれぞれ形容詞が加わり7強音になっている。wohlgezogener では本来の「よく」の意味の wohl が強音節として扱われていて、「埋め草」の wohl の弱音節とはっきり区別されている。

(2) wohl を強音節として扱っているもの

強音節として扱っているものは次の1曲である。Es wollt ein Jäger jagen wol in das Tannenholz. (猟師がモミの木森へ狩りに行くことを望んだ) (DLh III 298)

第1バージョン



別のバージョン



行頭の弱音節 Es が1拍目に置かれて、転置強音として扱われている。山口は「ヤンプスの詩の行頭では強音を転置できる、つまり「- - - - -」の代わりに、「- - - - -」と読んでいいと云うことである¹⁵⁾」と書いている。Es wollt ein Jä- はもともとヤンプスの「- - -」であるが、行頭であるので、「- - -」と読んでいいということである。

そしてこの民謡ではさらに行の最初の Es wollt ein の「- - -」が、行の後半の wol in das でも繰り返されて、「- - -」となっている。「ツェズールの先行と云う条件さえととのえば、リズムの転換は行中でも可能であり、それはしばしば意図的に行われている¹⁶⁾」という

記述がある。ツェズールとは中間休止のことである。この場合、wolの前に休符があり、これは記述の通りツェズールが先行している例である。wol in das Tan-は「- - -」のヤンプス詩行であるが、ツェズールが先行しているので、行中ではあるが「- - -」とリズムの転換が可能であるということである。ということは、wolはやはりもともと弱音節として受け止められているということになる。

c. Er で始まり《魔王》の第1節第3行と同じ文構造によるもの

前項で扱った詩行はいずれも詩の最初の第1節第1行であり、童話の冒頭で用いられる《予示的》な es で始まっていた。この es は《1 格で；文頭の位置を埋める仮の主語として；定動詞の形は後出の主語によって決まる》¹⁷⁾ というものである。

そしてこの es で始まる詩行の中の（あるいは、その後の詩行の中で新たに現われた）主語の名詞を er などの代名詞で受けて代名詞 + 他動詞 + 名詞句 + wohl + 前置詞句の文構造で、物語をさらに発展させるものが多くみられる。DLh では全部で 20 例ほど確認できた。

これらはいずれも《魔王》の Er hat den Knaben wohl in dem Arm. と同じ文構造である。wohl はすべて弱音節として扱われている。DLh から 7 詩行の旋律を挙げておく。拍子記号は曲頭でないので、記していない。

(1) Es hütet ein Schäfer wol an dem Rain, o weh! (DLh I 635) の第7節第1行 Er nahm das Kind wohl auf den Arm, o weh! (彼は子供を腕に取った、ああ悲しい) 第1節第1行では wol であったがここでは wohl になっている。



(2) Es blies ein Jäger wohl in sein Horn. の第3節第1行 Er zog sein Netz über den Strauch. (彼は木の上に網を張った) これも前項で挙げた例のもので、節は違うが第1行なので、旋律は同じである。



これも wohl + 前置詞句がセットになって繰り返されている。

(3) Es fuhr ein Fuhrknecht über den Rhein. (車力がライン河を越えて行った) (DLh I 568) の第23節第1行 Er nahm das Kindlein wohl auf den Arm. (彼は子供を腕に取った)

第1旋律 オリジナル



第2旋律



第3旋律



(4) Es ritten drei Reiter zum Thore hinaus, ade! (3人の騎馬武者が城門から出て行った、さらば) (DLh II 560) の第3節第1行 Er scheidet das Kindlein wohl in der Wieg'n, ade! (彼は揺りかごの中の子供に別れを告げる、さらば)



(5) Es wohnte eine Wittwe im grünen Holz. (未亡人が緑の森に住んでいた) (DLh I 192) の第8節第1行 Sie legten das Mädchen wohl auf den Tisch. (彼らは少女をテーブルの上に置いた) sie (彼ら) は第2節第1行に出てくる drei junge Landherr (3人の若い領主) を受けている。



(6) Es thät ein König ausreiten. (王様が遠乗りをした) (DLh I 383) の第8節第3行 Er zog sein Messer wol aus der Scheid, (彼は短刀を鞘から抜いた)



(7) Es spielt ein Markgraf mit einer schönen Dam. (辺境伯が美しい夫人と遊んでいる) (DLh I 400-401) の第3節第1行 Er zog den Degen wol aus der Scheid. (彼は鞘から刀を抜いた)



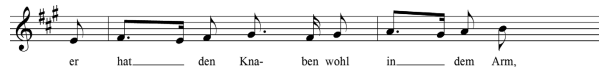
B. シューベルト以前の魔王作品における wohl

シューベルト以前の魔王作品で楽譜を参照できたものは7曲ある¹⁸⁾。これを wohl の強弱の扱いの違いによって二つに分けて検討する。

1. wohl を弱音節として扱っているもの

シューベルト以前の魔王作品で wohl が弱音節として扱われているものが7曲中5曲ある。第1節第3行の歌唱旋律は次の通り。数字は生-没, 成立年を示す。

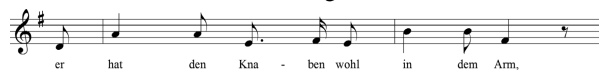
シュレーター (Corona Schröter 1751-1802, 1782)



ライヒャルト (Johann Friedrich Reichardt 1752-1814, 1793)



ロンベルク (Andreas Romberg 1767-1821, 1793)



ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven 1770-1827, 1809)



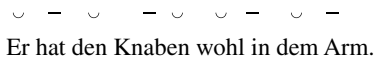
クライン (Bernhard Klein 1793-1832, 1815 出版)



a. 強弱の配列

8分の6拍子のシュレーター、ロンベルク、ペーターヴェン、クラインでは wohl が6拍目に、8分の3拍子のライヒャルトでは3拍目に置かれていて、いずれも弱音節として扱われている。

強弱の配列は



である。

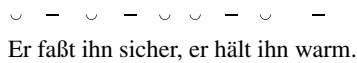
b. Er hat den Knaben wohl in dem Arm. の文構造

この文の動詞の hat は『独和大辞典』の「《場所を示す語句と》(…を…に) 持っている。…:『空間的』¹⁹⁾」の場合に当てはまる。例の一つに et.⁴ in der Hand haben... を手に持っている、が示されている。興味の中心は何を何処に持っているかである。wohl なしの Er hat den Knaben in dem Arm. の文の意味は、「父親が男の子を腕の中に持っている」ということである。

しからば wohl はこの文の中でどのように関係づけられるのであろうか。

Hirschenauer は第1節第3行から第4行にかけての er hat, er faßt, er hält をそれぞれ wohl, sicher, warm と対応させている²⁰⁾。

第4行の強弱の配列は



であり、faßt, si-, hält, warm が強音節で、sicher, warm がそれぞれ faßt, hält を修飾し、《語飾》²¹⁾の副詞として緊密に結びついている。

しかし wohl を弱音節としてとらえた場合、hat と wohl は同じような緊密な結びつきをもっているといえるであろうか。

第3行は den Knaben (男の子) を in dem Arm (腕の中に) hat (持っている) が文の骨格である。wohl を弱音節として扱っている5曲はいずれも hat, Kna-, in, Arm の四つの音節が各小節の1拍目に置かれていて、強音節を明確に示している。それに対して wohl はドイツ民謡の「埋め草」のように、ほとんど意味のない、口調のためだけの言葉として使われているように見える。hat と wohl の間には第4行の faßt と sicher, hält と warm のような結びつきは感じられない。

2. wohl を強音節として扱っているもの

7曲中バッハマンとツェルターの2曲が wohl を強音節として扱っている。しかし、その扱い方が違うので、それぞれを別々にみていく。

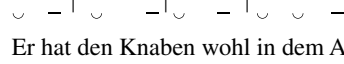
a. バッハマン

バッハマン (Gottlob Bachmann 1763-1840, 1798)



(1) 強弱の配列

強弱の配列は



である。「-」のヤンプスの詩脚を3回繰り返して、「-」のアナペストの詩脚でこの詩行を締めくくっている。wohl は強音節として扱われているが、ヤンプスの繰り返しの中で、4拍子の4拍目に、しかも旋律的にも順次進行で現われるので、特に強いアクセントは感じられない。

(2) wohl が強音節になることによる文構造の変化

wohl が強音節になることによって、-ben と wohl が「-」ヤンプスで結びつく。その結果、den Knaben を介して wohl が《語飾》²¹⁾の副詞として hat を修飾して Er hat den Knaben wohl. (彼は男の子を「しっかり」持っている) という文が成立するかもしれない。しかしそのために次の in dem Arm が取り残されてしまうようにも思える。

b. ツェルター

ツェルター (Carl Friedrich Zelter 1756-1832, 1797)



(1) 強弱の配列

この曲では行頭の弱音節 Er が1拍目に置かれ、転置強音として扱われている。そしてそれだけでなく行の最初の Er hat den の「-」が、行の後半の wohl in dem で同じ形で繰り返され、「-」となっている。民謡のところでも触れたように、「ツェズールの先行と云う条件さえととのえば、リズムの転換は行中でも可能であり、それはしばしば意図的に行われている¹⁶⁾」この曲の場合、前記の民謡 Es wollt ein Jäger のようにツェズールが休符ではっきり示されてはいない。しかし、-ben にかけての16分音符と8分音符による下位レベルでのヤンプス「-」の結びつきが、-ben の音節上でのリズムの流れの一時停止を生み、次の wohl からの「-」の繰り返しの頭を明確にしている²²⁾。



Er hat den Knaben wohl in dem Arm.

下位レベル -

第二次レベルでの wohl と Arm の強弱は「-」であり、wohl の微妙なアクセントの強さも感じとれる²³⁾。

(2) 文構造

wohl は、次の前置詞句と結びついている。wohl が強音節ではあるが、民謡と同じく wohl + 前置詞句でセットになっている。したがって、バッハマンのように

wohlがhatを修飾するということはない。

行頭と行中の開始がこの詩行だけ強音節になっていることも特徴的である。語り手の第1節第8節の残りの詩行はすべて行頭、行中ともに弱音節で始まっている。

— ◡ ◡ — ◡¹ — ◡ ◡ —

Er hat den Knaben wohl in dem Arm.

また、ツェズールの位置は-benとwohlの間にあり、wohlを弱音節として扱っている場合と同じバランスになっている。ツェズールがwohlの後にあったバッハマンとはこの点でも異なっている。

C. シューベルトの《魔王》の wohl

これまで、ドイツ民謡とシューベルト以前の魔王作品における wohl の音節の扱いについてみてきた。

シューベルトの《魔王》では wohl は1拍目に置かれていて、強音節として扱われている²⁴⁾。

シューベルト



リズムだけを見ると、強弱の配列はバッハマンの場合と同じく、ヤンプス「◡」が3回繰り返えされて

◡ — ◡ ◡ — ◡¹ — ◡ ◡ —

Er hat den Knaben wohl in dem Arm.

wohlとinの間に行中の切れ目ができて、詩行の左右のバランスが崩れているように見える。

しかしシューベルトの歌唱旋律はそうではない。メロディの要素が大きく加わるのである。

A. アインシュタインは *Deklamation und Melodie* (朗唱と旋律) の項で、シューベルトの朗唱上の誤りが指摘されていることを紹介し、その例として《魔王》の第1節第2行 *Es ist der Vater mit seinem Kind.* の *der* と *sei-* と第3節第3行 *Manch bunte Blumen sind an dem Strand.* の *an* を挙げている²⁵⁾。イタリック体で記されている定冠詞 *der*、所有冠詞 *sei-*、前置詞 *an* の、いずれも軽い音として扱われるべき音節が旋律的に上昇したり長くなったりして強調されているということであろう。



デュルはこれに関連して、「内容的に重要でない音節が旋律の頂点の音あるいは跳躍進行によって強調されている²⁶⁾」として、第1節第2行に加えてこの第1節第3行 *er hat den Knaben wohl in dem Arm.* を挙げている。

ここで注目したいのは *hat* と *wohl* がイタリック体になっていることである。デュルの言葉を借りれば、*hat* と *wohl* は内容的に重要でない音節であることになる。

hat は前記の通り、興味の中心は *何を何処* に持っているかであり、次の第4行の *faßt* (掴む) や *hält* (保つ)

と同じように具体的な動作としての「持つ」を問題としているわけではない。そういう点で *hat* は強音節ではあるが、*Knaben* や *Arm* よりは重要でないということであろう。

また、*wohl* はすでにドイツ民謡やシューベルト以前の魔王作品で見たように、「埋め草」として、あるいは弱拍で用いられていて、やはり重要でない音節と見做されているのであろう。

ところがシューベルトの《魔王》では *hat* と *wohl* はそれぞれ前の音節の音 *b*¹ から完全4度音程上昇してこの詩行の最高音 *es*² で歌われる。しかも *wohl* は旋律だけではなく、リズムの上でも第1拍に置かれてはっきりとした強音節として扱われている。*hat* の方はもともと強音節であり、第1拍に置かれて当然であり、旋律のみの問題である。

wohl を強音節として扱っていたバッハマンもツェルターも、このシューベルトのように旋律の上でも、大きく上昇して *wohl* を強調してはいなかった。シューベルトの *wohl* が際立って強調されているのは明白である。

また、詩脚の面からみてもシューベルトでは、-ben と *wohl* の間に完全4度音程の旋律の断絶が生じているため、*wohl* が次の *in* と結びつかざるを得ず、詩脚は

◡ — ◡ ◡ — ◡¹ — ◡ ◡ —

Er hat den Knaben wohl in dem Arm.

となり、ヤンプス、アンフィブラヒュス、トロヘウス、ヤンプス (歌唱旋律は *Arm* の1拍目の強音節が掛留音になって次の2拍目の弱拍で解決して「◡—◡」のアンフィブラヒュス) となる。*hat* と *wohl* が詩行の中の同じ最高音で響くので、*wohl* が *hat* と結びついて *hat* を修飾しているかのように聞こえるかもしれないが、*wohl* は次の前置詞句と結びついて、詩行の後半の頭の音として、詩行全体のバランスを取っているのである。

◡ — ◡ — ◡¹ — ◡ ◡ —

Er hat den Knaben¹ wohl in dem Arm.

これは詩行の行頭が弱で始まり詩行の後半が転置強音で始まるという形である。これは他の魔王作品にはないものである。山口は「ゲーテにあつては、コーロンが、一般に非常に重要な意味をもつ」(Kayser) や「ゲーテの詩の魔術と秘密はツェズールの扱いにある」(F. Zarncke) という言葉を紹介し、「ゲーテがこれをかかなり意図的に使い、リズムの多様化をはかっていることは明らかである²⁷⁾」と述べている。コーロンとは、ツェズールや間によって句切られた *Wortgruppe* (単語のまとまり) である。そこで例示されている詩行も6例中5詩行で行頭がヤンプスで始まり、ツェズールの後の行中の開始が強音節になっている。

なお、前項で見たツェルターの場合もシューベルトと同じように、*wohl* が強音節として扱われ、しかも *wohl* の前にツェズールがあった。しかし、ツェルター

の場合、行頭のErも転置強音で強音節として扱われていた。ところがシューベルトでは

Er hat den Knaben¹ wohl in dem Arm.

のように行頭は転換されず、弱音節のままである。語り手の第1節と第8節の8詩行の中で、行頭、行中の開始の音節のうち、このwohlだけが強音節で始まっている。それがまた、wohlの強音節としての効果を一層大きなものにしてている。

II. wohlの強弱と意味

これまで、ドイツ民謡、シューベルト以前の魔王作品、そしてシューベルトの《魔王》という順で、wohlの強弱の扱いに焦点を絞って見てきた。その結果、ドイツ民謡のほとんどすべてと、シューベルト以前の魔王作品の7曲中5曲がwohlを弱音節として扱っていた。

その一方、バッハマン、ツェルター、シューベルトのように、数は少ないが、wohlを強音節として扱っている作曲家もいた。なかでもシューベルトは強音節を強く意識してwohlに強いアクセントを与えていた。

このようにwohlが強音節として扱われた場合、wohlはもともとの副詞の「よく」、「十分に」、「しっかり」等の意味でアクセントのある語として動詞hatを修飾しているのであろうか。

ツェルターとシューベルトのwohlはリズムの詩脚の関係で、次の前置詞句と結びついていた。これはwohlが弱音節として扱われた民謡などのwohl+前置詞句のセットの形と同じである。そしてこの形は、形だけでなく、弱音節として扱われたwohlと強音節として扱われたwohlが基本的には同じ意味をもち、ただその意味の程度の違いによってアクセントの有無が分れるというようなことは考えられないであろうか。

グリムの„Deutsches Wörterbuch“では、wohlの項に、「主観的な主張の不変化詞 (Partikel subjektiver Beteuerung) としてwohlは素朴な物語様式、民謡と民謡様式での詩において非常に好まれていて、ここではしばしば単なる詩行の埋め草 (Versfüllsel) へと色あせている²⁸⁾」と書かれている。

民謡の「埋め草」としてのwohl、そして民謡と同じ文構造の中で用いられている《魔王》のwohlは、色あせる前は「主観的な主張の不変化詞」であったということではないであろうか。

そこで次に、不変化詞としてのwohlについて、特に音節の強弱との関連の中で考えてみる。

A. 不変化詞としてのwohlの意味

グリムの辞典では前記のように「主観的な主張の不変化詞」という言葉が使われていた。

『独和大辞典』では不変化詞という語は使われていな

いが、wohlの項で「《陳述内容の現実度に対する話し手の判断・評価をしめして：→vielleicht 1, wahrscheinlich II) a) 《ふつう文中でのアクセントなしで》おそらく、たぶん、きっと、たしかに²⁹⁾」と説明されている。

vielleicht, や wahrscheinlich は不変化詞の中の話法詞 (Modalwort) と呼ばれるものに分類されている。『独和大辞典』の編集委員でもある岩崎は、wohlについて「陳述内容の現実度についての話し手の評価を示している点では狭義の話法詞と共通のものを持っているが、話法詞のようにその評価を語彙の持つ意味によって明示するのではなく、陳述内容の信憑性についての話者のいささかの疑念、それを100パーセント確信するこのできない話し手の心の揺れを聞き手に伝えるシグナルのはたらきをしているのではないだろうか³⁰⁾」と述べている。

田中はwohlの意味特徴を、「命題の真実性に対する特定の可能性の高さを表さず、命題が事実であると想定してはいるがそれに必ずしも疑いの余地なしとしない (疑いの余地を認める) 話し手の主観的な心的態度を表す³¹⁾」とまとめている。

岩崎の「話し手の心の揺れを聞き手に伝えるシグナル」、田中の「話し手の主観的な心的態度」はグリム辞典の「主観的な主張」にもつながるものと思われる。鈴木は「……命題に対する話し手の心的態度を示すものが心態詞 (Abtönungspartikel) と呼ばれる³²⁾」としており、話し手の心的態度を表すwohlは心態詞と呼んでいいのであろう。

DudenのGrammatikでは心態詞 (Abtönungspartikeln) について「特定の副詞は—とりわけ話し言葉で—陳述に色づけし、陰影 (ニュアンス) をつける (abtönen) ために用いられる。話し手/書き手はそれらを用いて自分の不思議に思う気持ち、自分の腹立たしい気持ち、自分の疑いの気持ち、自分のあきらめの気持ち等々を表現する³³⁾」と説明されている。「自分の (seineあるいはseinen)」はやはりグリムの「主観的な」につながるもので、ここでも民謡のwohlと心態詞のwohlの関係を感じさせる。

さらにこの心態詞の語の脚註には「しばしばWürzwörter (葉味の語)、Füllwörter (虚辞, 助辞) とも呼ばれた不変化詞」と書かれている。独和辞典の民謡のwohlで出てきた「埋め草」等と同じものを指していると思われる。

B. 心態詞wohlのアクセントの有無

『独和大辞典』にはwohlの項で「ふつう文中でアクセントなしで」と書かれていた。しかし前記のようにシューベルトの《魔王》を含め、魔王作品にはwohlを強音節として扱っているものがあった。心態詞ではアクセントの付く場合もあるのであろうか。

wohlを独和辞典の「意味のない口調を整える言葉

とすると、「概念語以外の1音節語、例えば「in」とか「und」と云った語は、それ自体としては強音をもつとも、もたぬとも云えない、いわゆる neutral なもので、これらはその詩の全体的なリズム、隣接する音節との関係等によって、強音を持ったり持たなかったりする³⁴⁾という記述がある。

また、Brockhaus Wahrigの独語辞典の wohl の項の7番目に、「betont od. unbetont アクセント有り、あるいは、アクセント無し; Partikel ohne bestimmte Bedeutung 特定の意味のない不変換詞 (Partikel); verstärkend 補強する³⁵⁾」という説明がある。

そして筒井は Zimmermann³⁶⁾ の見解を補足する形で、心態詞 „wohl“ (これはアクセントのある wohl とアクセントの無い wohl の両方を含む) の共時的な共通意味に関する自身の結論を導いている³⁷⁾。

心態詞としての wohl にはアクセントの有るものと無いものがあるようである。

そこで以下、筒井論文のなかで wohl のアクセントの有無に関係する箇所をいくつか抜粋して紹介する。なお、筒井論文ではアクセントではなく強勢という言葉が使われている。

1. 強勢の置かれない wohl (wohl)

まず、wohl (強勢の置かれない wohl) については次の例で説明している。

- a. Hein ist auf See. (Hein は海へ出ている) = 「断定」
- b. Hein ist wohl auf See. (Hein はたぶん海へ出ているだろう) = 「推測」

a. の「Hein は海に出ている」「= 断定」という命題は両立不可能な世界、例えば「Hein は海に出ている」や「Hein は地上にいる」といった世界が排除される。一方、依然両立可能な世界、例えば「Hein は船に乗っている」や「Hein は背が高い」といった世界は保持されることになる。

それに対して、wohl が用いられた b. の「Hein はたぶん海に出ているだろう」「= 推測」という命題では、「Hein は海に出ている」と「Hein は海に出ている」のどちらの世界とも両立したうえで wohl による推測が追加されると分析される (筒井、225-226)。

2. 強勢の置かれる wohl (WOHL)

筒井は「WOHL (強勢の置かれる wohl) の用法では、先行発話において、反対命題が明示される場合がほとんどである。比較的高い蓋然性を示す話し手の確信をもって、相手の否定的な評価を打ち消して肯定するのである。」と述べている (筒井、227)。

そして例として反対命題 A とそれに対する反論的断定として

- A : Hein ist nicht auf See. (Hein は海に出ている)
- B : Hein ist WOHL auf See. (Hein は海に出ているよ)

を挙げている (筒井、227)。

ただ、Zimmermann が B を「反論的な断定として扱っているのに対して、話し手による確信の態度表明が、発話行為レベルにおいて「断定」であるか否かには疑問の余地がある。」として、筒井は発話行為レベルでは「断定」と「断言」の関係、さらに認知的モダリティのレベルでは、「確実性」と「不確実性」の關係に言及することで、「wohl」の意味的な共通性の抽出を試みている (筒井、228)。

なお、言明型の発話行為タイプには、下位分類の中に「断定」と「断言」の区別が見られるということで、その定義を次のように記している。

- a. 断定：話し手が、推理や信念ではなく、客観的な事実・証拠に基づいて、ある命題を陳述すること。
- b. 断言：話し手が、客観的な事実ではなくとも、自らの確信あるいは推論的な根拠に基づいて、ある命題を陳述すること (筒井、230)。

そして最後に筒井は WOHL の適切な用法として

A : Er hat die Prüfung nicht bestanden.

B : Er hat sie WOHL bestanden.

の例を挙げ、「話し手 A の発話は「彼は試験に合格しなかった」という事態を真であるとみなす「断定」であり、「彼は試験に合格した」という命題 (世界) の排除を意味する。一方、話し手 B の発話は、「彼は試験に合格した」という事態を「確信している」とする「断言」である」とし、「この発話は、確かに話し手 A の発話に対する反論ではあるが、…「断定的な反論」ではなく、「断言的な反論」である」と分析している (筒井、235-236)。

また、強弱の問題に関しては、「本来 WOHL には「陳述の強化」という機能が備わっており、このことが、命題に対する話し手の確信の態度に結びついている。そして、その結果、反論として用いられるようになったと考えられる」と述べている (筒井、228)。

Ⅲ. 《魔王》の第1節における語り手の情景描写の推移—wohl を中心に—

以上、I. でドイツ民謡、シューベルト以前とシューベルト自身の魔王作品の歌唱旋律における wohl の強弱の扱いを、II. で心態詞 wohl のアクセントの有無と意味の違いについて述べてきた。

ここではそれらを踏まえて、まとめを兼ねて、《魔王》の第1節の語り手による情景描写の推移をたどってみる。日本語訳はできるだけ直訳にした。

第1行

Wer reitet so spät durch Nacht und Wind?

(誰だろう、こんなに夜遅く暗闇と風の中を馬に乗って行くのは)

夜遅く、語り手はおそらく眠っていたのであろう。馬のひづめの音で目を覚ます。風もピュウピュウ吹いている。語り手は先ず音によって耳から状況を把握する。そしてそれが誰なのかと自分自身に問いかける。

第2行

Es ist der Vater mit seinem Kind;

(それは子供を連れて父親だ)

眠気を払いながら窓際に走り寄り外を見る。夜遅く、暗くて、しかも遠くの方でよくは見えないが、馬に乗っているのは子供を連れて父親のようだ。語り手は状況を目で確かめようとする。第1行の聴覚から、この第2行では視覚による情景描写に移っている。しかし暗闇で遠いため、父親の連れてくる子供が男の子か女の子かは分からない。Kindの語はWindとの脚韻の関係で選ばれた一面はあるが、意味としては中性の子供である。大きな父親に対する小さな子供、また、seinem(彼の)の語から、親子関係の中の子供であり、男女の別は定かではない。

第3行

Er hat den Knaben wohl in dem Arm,

(父親は男の子をたぶん腕の中に持っているのだろう)

暗さに目が慣れて馬も次第に近づいてくる。第2行の段階で大きな父親のほうははっきり確認できていた。父親を代名詞のEr(彼)で受けている。しかし子供の方は男女の別は分からなかった。この第3行ではさらに馬が近づいてきてどうやら男の子のように見えるが、岩崎の言葉を借りれば、100パーセントそうとは言い切れない。語り手としてはどうも疑いの余地が残る。wohlは100パーセント確信できない語り手の心の揺れを伝えるシグナルになっている³⁰⁾。

また、筒井の言葉を借りるとどうであろうか。

wohlの場合

Er hat den Knaben wohl in dem Arm, = 「推測」では、「彼は男の子を腕の中に持っている」と「彼は男の子を腕の中に持っていない」のどちらの世界も両立したうえでwohlの推測が追加される。50パーセントの可能性の上での推測である。

wohlを弱音節として扱っていた《魔王》の作品の中から、1曲ライヒャルトの歌唱旋律を改めてまた示しておく。



WOHLの場合

Er hat den Knaben WOHL in dem Arm, (彼は男の子を腕の中に持っているよ) = 「断言」では、先行する発話において反対命題Er hat den Knaben nicht in dem Arm, (彼は男の子を腕の中に持っていない)がこの詩には示されていない。しかしこの場合、この反対命題は語り

手が心の中でつぶやいた先行発話と解釈できないであろうか。暗闇の中を近づいてくる馬と親子に目を凝らしながら、前の詩行のKind(子供)と同時に直後にこの反対命題が心の中でつぶやかれたのではないか。そしてその間にも馬はさらに近づき、この第3行の「比較的高い蓋然性を示す話し手の確信でもって、相手の否定的な評価を打ち消して肯定するのである(筒井、227)」「相手」とはこの場合は語り手自身である。

wohlを強音節として扱っていたツェルターとシューベルトの歌唱旋律を改めてもう一度示しておく。

ツェルター



シューベルト



「WOHLには「陳述の強化」という機能が備わっており、このことが、命題に対する話し手の確信の態度に結びついている(筒井、228)」という。この両者のwohlは同じ強音節として扱われてはいるが、すでに見たように、旋律的にはシューベルトのwohlが際立って強調されていて、「陳述の強化」の機能がより多く備わっており、「彼は男の子を腕の中に持っている」という命題に対する語り手の確信の態度に、より強く結びついている。より高い蓋然性を示す語り手の確信でもって、語り手自身の否定的な評価を打ち消して肯定しているのである。シューベルトのwohlには、100パーセント近い確信をもって断言する語り手の気持ちが込められているのではないか。

第4行

Er faßt ihn sicher, er hält ihn warm.

(父親は息子をしっかりと掴み、温かく保っている)

親子の乗る馬がさらに近づいて目の前にくる。wohlが弱音節で第3行では「推測」の段階であったwohlの場合でも、語り手は「父親が腕の中に男の子を持っている」ことを確信し、第3行のden Knabenをihn(彼を)で受けている。動詞も第3行のhatからfaßt(掴む) hält(保つ)と、具体的な、目の前で見ていような動作の描写になり、さらにそれぞれの動詞を強音節の副詞、sicher(しっかりと)、warm(温かく)が修飾する。第3行のwohlが文全体に関わる《文飾》であったのに対し、ここでは《語飾》に変わっている。しかも1詩行に短く二つの文章が現れ、語り手の情景描写のテンポが速くなっている。目の前を通り過ぎる馬の速さを感じさせる。さらにシューベルトの旋律ではdem Armが「ー」になることによって詩行の前半、後半の終わりにアンフィブラヒュスが三つ続き、この馬の軽やかな走りさらには加速させている。

おわりに

ドイツ民謡における「埋め草」としての wohl や魔王作品の弱音節として扱われている wohl を見ていく中で、シューベルトの《魔王》のはっきり強調された強音節としての wohl との違いを強く感じていた。

ただ、音節の強弱の扱いは違うが、同じ文構造の中で、両者は基本的には同じもではないのかという思いが捨てきれなかった。そんな中で、不変化詞や心態詞としての wohl についての研究論文に出会い、新しい見方が開け、シューベルトの《魔王》における wohl の意味を改めて考えることにつながった。

心態詞の微妙なニュアンスはなかなか掴みにくい面がある。田中も前掲論文の中で、アクセントの置かれた wohl を含む文を、ネイティブ・スピーカーは、wohl を含まない文よりもむしろ「和らげられた主張」とみなす傾向にある、と述べている³⁸⁾。これを機に、心態詞 wohl の情報に幅広く接して、《魔王》の wohl の意味と機能をさらに突き詰めてみたい。

註

- 1) 鴫田信男「シューベルト《魔王》を読む一詩の強音による朗唱パターンをめぐって一」(愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編 第63輯、2014) 61-69 (以下、ページ番号はイタリック体とする)
- 2) 相良守峯『Großes Deutsch-Japanisches Wörterbuch.』(博友社¹⁶⁾/1970) 1705. Birschは正しくはPirsch。
- 3) 佐藤通次『独和言林』(白水社、²/1971) 1486
- 4) R. シンチンゲル、山本明、南原実編『独和広辞典』(三修社、1986) 1564
- 5) 富山芳正編集主幹『独和辞典』(郁文堂、1987) 1657
- 6) 国枝孝二編集代表『独和大辞典』(小学館、²/1998) 2706
- 7) 濱川祥枝監修『クラウン独和辞典』、三省堂、⁴/2008、) 1640
- 8) 佐々木庸一『ドイツ・リート名詩百選』(音楽之友社、⁷/1971) 188
- 9) 田辺秀樹「歌で楽しむドイツ語」(NHK ラジオドイツ語講座 2002年9月号) 74
- 10) Johann Wolfgang Goethe *dtv-Gesamtausgabe*, München, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1961. Bd 3. 134
- 11) *Deutsche Volkslieder: Texte und Melodien* (Universal-Bibliothek, Nr. 18479. Reclam, 2006. 226-227. 以下 DVI とする。
- 12) インターネットの Lieder Archiv (www.lieder-archiv.de) による。符尾や連符の一部は修正した。
- 13) この二つの民謡はこの第1詩行の旋律は同じである。しかし、第2詩行以下の旋律は微妙に異なり、Es gingen drei Jägerの方がHasch! Haschというリフレインの終止部分で終わっている。これらは1750年ころのIch hab mir mein Weizen am Berg gesät (Der Besenbinder) にLudwig Uhland (1787-1862) がそれぞれ1809年と1811年に詩をつけたものである。
- 14) Ludwig Erk, Franz M. Böhme, *Deutscher Liederhort: Auswahl der vorzüglicheren deutschen Volkslieder, nach Wort und Weise aus der Vorzeit und Gegenwart*, Bd. I II III. Georg Olms Verlag, 1972
- 15) 山口四郎『ドイツ詩必携』(鳥影社、2001) 20
- 16) 山口、前掲書、26

- 17) 『独和大辞典』714
- 18) 楽譜はMax Friedlaender (hrsg.). *Gedichte von Goethe in Compositionen seiner Zeitgenossen*. Weimar: Verlag der Goethe-Gesellschaft, 1896 (シュレーター 64、ライヒャルト 64、ベートーヴェン 143、クライン 68、ツェルター 72) と Werner-Joachim Düring, *Erlkönig-Vertonungen. Eine historische und systematische Untersuchung*. Notenteil, Gustav Bosse Verlag, Regensburg, 1977 (ロンベルク、バッハマン) (通しの頁番号はない) を使用した。
ベートーヴェンの楽譜は、グスターフ・ノッテボーム (武川寛海訳) 『ベートヴェニアナーナ 創作記録と手記の考證』(音楽之友社、1951) 121 も参照した。
- 19) 『独和大辞典』1004
- 20) Rupelt Hirschenauer und Albert Weber (Hrsg.), *Wege zum Gedicht, Interpretation von Balladen*. München und Zürich, 1968, ²/1976. 161
- 21) 『新マイスター独和辞典』(大修館書店、2006) ix では副詞について、その修飾する範囲によって、《語飾》(文中の特定の語句だけを修飾する場合)、《文飾》(文内容に対する話し手の判断・評価などを表す場合)、《話者の気持》(話し手の主観性の強い気持ちを表す場合) の三つに分けている
- 22) Leonard B. Meyer, *Explaining Music*, University of California Press, 1973. 34
- 23) リズムの構築的レベルについては、G.W. クーパー、L.B. マイヤー (徳丸吉彦、北川純子訳) 『新訳音楽のリズム構造』(音楽之友社、2001) 10-12 を参照。
- 24) Franz Schubert *Neue Ausgabe Sämtlicher Werke Serie IV: Lieder, Band 1, Teil a*. Kassel: Bärenreiter-Verlag. 1970. 4. Knabe と Arm の音は実際の演奏の時の音を表している。
- 25) Alfred Einstein, *Schubert Ein musikalisches Porträt*. Pan-Verlag Zürich, 1952, 120-121
- 26) Walter Dürr und Andreas Krause (Hrsg.), *Schubert Handbuch*. Kassel, Bärenreiter, 1997, ²/2010. 190
- 27) 山口、前掲書、27-28
- 28) Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd. 14. II. Abteilung, Verlag von S. Hirzel, 1960, 1061
- 29) 『独和大辞典』2706
- 30) 岩崎英二郎「wohl は話法詞か心態詞か」(『藝文研究』52号; 岩崎英二郎教授退任記念論文集、慶應義塾大学藝文學會、1988) 15
- 31) 田中一嘉「不変化詞 wohl の意味と機能—心態詞 ja との比較から—」(群馬大学教育学部紀要、人文・社会科学編 第50巻、2001) 243.
- 32) 鈴木康志「ドイツ語命令・要求表現における心態詞について」(『愛知大学 言語と文化』No.18, 2007) 85
- 33) *Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*, Bd. 4, Bibliographisches Institut, Mannheim, ⁴/1984, 351-352
- 34) 山口、前掲書、15
- 35) Brockhaus *Wahrig Deutsches Wörterbuch*, Bd.6, STE-ZZ, F.A.Brockhaus, Wiesbaden, 1984, 767
- 36) Malte Zimmermann, *Zum Wohl: Diskurspartikeln als Satztypmodifikatoren*. *Linguistische Berichte* 199. 253-286.
- 37) 筒井友弥「心態詞の意味と機能の研究—mal を中心に—」(広島大学大学院社会科学研究科国際社会論専攻博士論文、2009) 224. 以下、個々の引用ページは本文の中で引用ごとに示す。
- 38) 田中、前掲論文、244

(2014年9月24日受理)